

2018 年度 博士学位申請論文

フラグメント
断片・断章を書く

—初期フリードリヒ・シュレーゲルにおける
書記の実践と思考の諸相—

立教大学大学院文学研究科
ドイツ文学専攻博士課程後期課程

二藤 拓人

目次

凡例	vi
序論	2
1. 本論文の目的	2
2. これまでのシュレーゲル研究の方法と本論文の立場	3
3. 本論の構成	6
4. Fragment / Fragmente の日本語表記について	8
第一部：断章形式の成立	11
第一章：断片を読む—18世紀末における断片の諸相	11
導入—フラグメント研究史概観および本論におけるフラグメントの意味論的分類	11
1. 伝承に起因する断片—シュレーゲルによる古代ギリシア文学の受容	17
1. 1. 即物的な用法—『ギリシア文学の諸流派について』	17
1. 2. 物質性から観念性への転用—『ギリシア文学についての研究』	22
1. 3. 伝承に起因する断片の文献学的価値とそのメディア条件	27
2. 制作に起因する断章—メディア革命期における文芸ジャンルとして	29
2. 1. 18世紀の書籍・雑誌における「断章」の流行と流通	29
2. 1. 1. 未完成の作品を示唆するタイトル	29
2. 1. 2. 雑誌メディアにおける断章—アウグストの翻訳の掲載を手掛かりに	32
2. 2. 書簡に同封される草稿—断章を通じたロマン派の交流	35
2. 3. 断章の流行に対するシュレーゲルの反応	38
3. 断片の受容から断章の産出へ—転換点としての1797年	40
第二章：シュレーゲルにおける断章形式の構想	42
導入—「本来的な断章」をめぐって	42
1. 「断片からなる断片」—18世紀における断片思想からの影響関係	44
2. 「本来的な断章」の起源としての叙事詩	48

3. 個々の断章の自律性とその物質的条件.....	52
3. 1. 断章に対する〈緊密性〉の要求.....	52
3. 2. 物質と観念の両面性——「個性」と「絶対性」への関係付け.....	54
3. 3. 断片の〈完結性〉——「断章集」第 206 篇を手掛かりに.....	59
4. 断章の複数性——断章形式の成立条件に向けて.....	63
補記：断章とアフォーリズム——ジャンル規定上の類似点.....	66
第三章：断章の文体・書法の成立過程.....	68
導入——多様化する読書形態あるいは活字世代としてのシュレーゲル.....	68
1. シュレーゲルの多読を通じた研究手法——「単なる読書」から「研究」へ.....	71
1. 1. 「孤独な読書」に隠れる伝統的な黙読文化.....	71
1. 2. シュレーゲルにおける「研究」の概念規定——「循環的」読書.....	76
2. 書きながら読む技術.....	81
2. 1. 専門的な読書の系譜と文献学的技法の規定.....	81
2. 2. 黙読における抄録、蒐集の実践——文献学的技法との関連性.....	83
3. 断章の書法の成立——文献学的技法の変奏として.....	85
3. 1. 統一的なく〈著述〉からの逸脱.....	85
3. 2. 作業場の主題化——手稿段階における諸断章.....	88
4. 近代精神科学の挫折モデル？——文筆家シュレーゲルの多面性.....	92
《間奏》：「文献学」と「哲学」の分析——断章形式の一要素として.....	96
1. 新しいメディアにおけるプラトン哲学の継承と発展.....	96
2. メディア的基盤としての「文献学」.....	102
2. 1. 「文字」と「精神」——音声的要素の脱中心化についての試論.....	102
2. 2. 「文字による刺激」としての文献学.....	107

第四章：手稿断章群の書記現場(1)——文献学的技法から.....	110
導入——第二部での課題と主要な操作概念の説明.....	110
1. シュレーゲルの手稿断章群についての基本情報.....	112
1. 1. 『哲学的修業時代』と『文学ノート』——手帳への書記行為.....	113
1. 2. 『文献学のために』——研究状況と複写版刊行.....	116
1. 3. 手稿と原稿の区別	118
2. 断章的書記の分析——『文献学のために』を手掛かりに.....	121
2. 1. 文献学的技法から断章的書記へ.....	121
2. 2. 検証(1).....	123
2. 2. 1. J・ハリス『文献学の探究』の〈抄録〉と〈批判〉.....	123
2. 2. 2. テクストを読むことから〈考えを読むこと〉へ.....	128
2. 3. 検証(2).....	130
2. 3. 1. 〈注釈〉のための余白と疑問符の機能.....	130
2. 3. 2. 断章の筆記法とロマン主義的思考法.....	133
3. 〈二次的・受動的〉書記と断章表現.....	135
3. 1. 「自己読書」する著者から編集者の立場へ.....	135
3. 2. シュレーゲルにおける〈書くこと〉の技術 ——イロニーの理論との対比から.....	137
第五章：手稿断章群の書記現場(2)——下線強調の機能をめぐって.....	140
導入——断章的書記における下線強調の二つの役割.....	140
1. 下線の使用頻度についての注記.....	141
2. 〈編集工程〉における下線強調とシュレーゲルの編集方針.....	143
2. 1. 検証(1)——手稿段階での指示記号の行方.....	143
2. 1. 1. 「断章集」第404篇に至るまでの手稿断章について.....	143
2. 1. 2. 『アテネウム』誌のタイポグラフィをめぐって.....	146

2. 2. すべての断章の均等な強調あるいは下線を引かせるための活字体裁.....	150
3. 手稿断章群における〈思考過程〉を支える下線強調.....	153
3. 1. 検証(2) —〈論題〉選出の機能.....	153
3. 2. 「吟唱される詩のように書かれたもの」としての断章的書記.....	157
4. 断章群書記を可能にさせる筆記法—ロマン主義的「生成」を書く技術.....	161
第六章:断章の書記現場(3)—抽象化された概念操作の局面.....	166
導入—筆記法としての定型句と省略記号.....	166
1. 相互の〈関係性〉を示す定型句.....	168
1. 1. 検証(1)	169
1. 2. 「機知」との関連付け—レッシング論を手掛かりに.....	171
1. 3. 検証(1') —シュレーゲルによる「結合術」の実践?	175
2. 〈同時性〉を示す定型句.....	181
2. 1. 検証(2).....	181
2. 2. 「最高の機知」との関連付け—連続と非連続の同時性の記述.....	183
補記:開始地点に対する定型句.....	185
3. 術語に対する省略記号と図形による術語の配置.....	187
3. 1. 検証(3) —筆記と思考の効率化.....	188
3. 2. 検証(4) —図形によるイメージの素描.....	192
4. 「諸断章からなる客観的なシステム」の構想—非感情的なロマン主義?	194
結論.....	200
参考文献.....	209

論文の要約

本論文の目的は、フリードリヒ・シュレーゲル (Friedrich Schlegel, 1772-1829) の 1790 年代から 1800 年代の公刊著作と遺稿 (及びその複写)、書簡集を主要対象に、この時期の彼の思考様式と表現方法の中枢を担う〈断片・断章を書くこと (Fragment Schreiben)〉の文化的・技術的な実態を、実際の断章の文体・書法に即して解明することにある。そのためにまず第一部「断章形式の成立」では、18 世紀後半において断片の語が多義的に使用されている状況や、この語を用いた表現がシュレーゲルの書記行為において成立する経緯について、当時の文化的諸要因、メディア技術的諸条件との関連から論究する。これを踏まえて第二部「書記の技術としての断章」では、シュレーゲルの手稿・原稿を直接参照しながら、彼の断章的書記について〈筆記法 (Aufzeichnungsmethode)〉という枠組みにおいて分析する。フラグメントについての従来の研究は、断片の美学的意義の究明や、ロマン派における芸術・文芸への理論的貢献に関心が集中しており、この表現形態の文化的実践あるいは書記的内実に関わる以上の二つの観点は十分に吟味されてこなかった。先行研究で議論されてきた初期ロマン派の断片思想の理論的・観念的な内容を踏襲しつつも、本研究はシュレーゲルにおける〈書くこと〉が内包する様々な要素——読むこと、蒐集、抄録、注釈、批判、編集、推敲、印刷、出版——を明らかにするものである。それによって本論は、これまで体系的な記述がなされてこなかった断章形式の実践的側面をより明瞭にし、書記行為としての断章がシュレーゲルの思考において有する意義の総合的かつ包括的な解明を目指す。

本論における方法論上の特色は以下の二点にある。まず、主たる分析対象として実際に断章形式で書かれたテキスト(シュレーゲルの遺稿や公刊著作におけるアフォリズム)を選出し、その多重的かつ多面的な読みの可能性に向き合いながら、断章のあいだに生じる複数の意味連関を、予め与えられた解釈格子によって制限することなく検討していく点が挙げられる。これにより一方で、従来の研究において考察の対象になることが殆どなかった遺稿断章であっても、本論の設定する課題の解明のためには重要な意味や機能をもつことを新たに示せるはずである。また他方では、まとまった状態で残るシュレーゲルの著作——古典古代の文学史記述、大学講義録および様々な文芸評論など——からだけでは十分に明らかにすることのできない、彼の断章という芸術表現に固有の意義を見出せると考える。本論の第二の特色は、シュレーゲルの手稿を分析する際に、彼の筆記の特徴に対して、ドイツ語圏における書記現場 (Schreibszene) 研究の方法論を適用す

る点にある。今世紀より本格的に始動したこの研究領域では、書き手（あるいは読み手としての書き手）の制作現場、書くことの行為遂行、テキストの生成過程などに焦点が当てられ、広くエクリチュール一般に関わる問題圏に対しての学問的基礎付けが目指されている。とりわけ断章的書記に見られる筆記法の体系的考察を行う本論第二部において、この分野における方法論の採用は効果的といえる。書記現場をめぐるこれまでの研究においては、シュレーゲルおよびロマン派の断章形式の特徴を十分に論じきれておらず、その点において本研究の成果はこの研究領域の拡大と深化にも積極的に貢献するものである。

本論文は、上記した第一部と第二部に対してそれぞれ三つの章を配置し、《間奏》を含め七つの章で構成される。以下、各章の具体的な成果を簡略に説明することで、本論文の要約とする。

まず第一章では、最初期（1792-1796）のシュレーゲルが自身の学問研究における古代ギリシア文学の断片（原典資料）、18世紀に書籍・雑誌媒体で出版されていた断章（印刷物）、ロマン派の私的サークルの中で読み交わされていた断章（草稿）を、読み手の立場から受容していた点について、当時の文化背景との関連において明らかにした。原典資料としての断片に関していえば、シュレーゲルは古代ギリシア研究諸論文において、自身の分析対象となる古典文献に対して、その物質的欠落部分の有無に応じて「作品」と「断片」とに表記を区別している。本論はここで、現存する原典の状態が念頭に置かれた彼のこうした記述の姿勢には、当時の文献学的・歴史考証学的な学問研究の慣習や、学術書を手にする読者層の関心事が反映されていると考察した。

断章形式の構想についての第二章では、アテネウム期（1798-1800）に書かれたシュレーゲルのテキストから、この時期から顕著になる断章の語の術語的な用法に関する彼の記述を分析した。ハーマン、ヘルダー、レッシングを始めとする同時代人からの思想的影響関係を考慮しながらも、本論はシュレーゲルによる「本来的な断章（*eigentliche Fragmente*）」の着想を再構成した。「本来的な断章」は叙事詩の特徴の一つとされる「思慮深さ（*Besonnenheit*）」をその本質としており、シュレーゲルの構想においては抒情的・感情的な表現とは無媒介に結び付かない。彼によれば、古代の英雄叙事詩が断片の集積であり、そこで個々の断片は、反省的・反復的伝承を通じて物語・歴史の全体に欠かせない核へと洗練されているという。彼の断章において決定的なのは、この古代叙事詩の諸断片の特性を近代の断章（文芸形式）の中で引き継ごうとする点にあるというのが本

章の主要なテーゼである。またこうした分析を通じて、シュレーゲルの場合は、最初期における物質的な資料^{マテリアル}のレベルでの断片・断章（原典資料、印刷物、草稿）の受容が、その後の断章についての思想に影響を与えているという、第一章の議論と連続する見解を提示した。

続く第三章では修業期（1794-1796）におけるシュレーゲルの多読を通じた研究手法に焦点を当て、それを1800年頃の標準とされる読書形態と比較しつつ考察した。本章では第一章に基づいて彼の手法の独自性を文献学的な習慣との比較から規定し、彼が断章形式を自らの文体・書法^{スタイル}として習得していく過程を明瞭にした。その際に特筆すべきは、読書や研究をめぐるシュレーゲルの見解が、多様化する読書文化に対して音読や朗読を擁護する当時の一般的言説と相違する点である。つまり彼は人前での朗読ではなく資料を幾度となく再読する「循環的読書」という、円環的な学知^{エンチクロペディ}の形成の構想から派生した作法を研究の中心に据えていたといえる。そこで本論は、シュレーゲルが幼少より印刷メディアを介して多量の情報を享受するようになる〈活字中心の世代〉に属するとみなし、読書形態への考え方をめぐって、彼においては同時代的な朗読擁護とは別の動機が生じうると考察した。また、自身の研究手法を示唆するシュレーゲルの書簡からは、体系的な著述ではなく、蒐集、編集、注釈などの作業がむしろ中心化していく様子を見て取ることができた。これに関して本論は、これらの作業を通じた資料の集積にこそ断章形式の成立の契機が含まれている点、その際に彼の活動が自身の執筆を第一に捉える〈著者〉の立場ではなく、書かれたものを再構成する〈編集者〉の立ち位置に立脚しているという点を明らかにした。

以上の第一部で十分に敷衍して論じきれていなかった、シュレーゲルによる書記性や文字メディアの位置付けについて、「哲学」や「文献学」、あるいは「精神」と「文字」に関する遺稿断章群での彼の記述を取り上げながら分析し、第二部に入る前の《間奏》とした。そこで本論は、シュレーゲルの「哲学」の規定が、ソクラテス・プラトンの対話哲学の直接性を活字メディアに基づく近代の表現形式においてをどのように継承すべきか、という問題意識に起因していると解釈した。これに従って、「文献学」なしには成立し得ないとされる彼にとっての「哲学」の内実が、18世紀当時のメディア的基盤をなす「文字」において遂行される哲学であり、更にこの意味における哲学の〈対話性〉を再現し得る書記表現に断章形式も含まれていることが明らかになった。

第一部においてシュレーゲルにおける〈断片〉の受容と〈断章〉の表現の交叉点を1797

年に特定した。第二部はこの時期の彼の手稿断章群（手帳への書き込み）における書記現場の具体相についての分析であるが、これを以下の三つの段階から詳述した。

第四章では、最初の段階である文献学的技法に由来する書記現場を扱った。第三章で取り上げた彼の書簡でも示唆されたように、シュレーゲルの手稿断章群の内実は〈読むこと〉を起点とし、それと連動して書き込まれた抄録、批判、注釈の集積であると見なすことができた。ここで本論は、自己の内面や意識の連続的な流れではなく、専ら自らの読んだものを基調にする非連続的・飛躍的な筆記の実態を〈二次的・受動的 (sekundärpassiv)〉な書記と定義し、これが断章的書記に顕著に認められる特性であることを論証した。断章の筆記法において特徴的なのは、余白の設けられた手帳のレイアウトである。つまり紙面の半分近くを占める欄外・余白は、シュレーゲルの実際の書き込みをみる限り、本文に書き込まれた断章を文献学的な考証の対象であるかのように読むことを誘引し、更なる批判的かつ発展的な書き込みを誘発する機能を果たしているといえるのである。

次の段階を対象とする第五章では、書き手を視覚的に操作・誘導する記号、とりわけ語句の強調を指示する下線の有する機能や効果に焦点を当てた。手稿における下線強調とは、一方で文章をその重要語句に即して二次的に読み返す所作の痕跡であり、また他方で書き出された書字にすぐ手を入れ、利用可能な資料に編集する作業の一環であるといえる。本章では断章的書記における下線の役割の違いから〈編集工程〉と〈思考過程〉という二つの範疇に分けて分析を行った。後者は、下線強調が編集工程における本来の目的から離れ、断章群の中での思考の論題^{トボス}の可視化に貢献している局面を指す。〈議題〉が強調されながら次の断章へと筆記されていく書記現場での展開について複写資料を用いて詳述したが、断章群には論題を生起させる無数のパースペクティブが混在し、それらのいずれかが下線で指示されて初めて、特定の観点に即して思考が可能になるというのが本章のテーゼである。その際に下線は、この思考過程を可能にさせる契機になっているという点で断章的書記の筆記法にとって欠かすことのできない操作である。

最後の第六章では、文献学的技法から離れ、定型句や省略記号が多用されることで、より抽象的な概念操作の段階へ到達している書記現場を取り上げた。この局面において本論は、記号表記を書き出し、視る（読み取る）という一連の動作と、そこでの思考とが、相乗的に速度を高め、抽象の度合を高めながら筆記が進んでいく事態を想定した。断章的書記において使用される定型句あるいは構文は、要素と要素、術語と術語との〈関

係性) や〈同時性)などを効率的に言語化する機能を果たしている。そこから本論は、定型句によって文中での文体や語彙が限定されることで、書き手は言葉の表現のレベルでの余計な配慮なしに、概念・術語同士の関連性や共通性を記述する作業に専念できるという仮説を立て、事例を手掛かりにそれを検証した。省略記号の機能について考察する際には、略語や数式が適用され、あたかも機械的な演算操作へと筆記・思考が接近している事例も挙げた。こうした断章形式の局面に対して、シュレーゲルによる「諸断章からなる客観性を志向するシステム」についての着想を、彼の形而上学的な思考モデルと関連付けながら再構成し、筆記法の実践とともに彼の理論的構想の面からも補完した。

断章の書記行為の内実は、以上の三つの段階が複合的に交錯していると捉えるのが妥当である。しかしながら断章群の筆記過程を段階的に分析する手法を取ることで、書記現場における多層的な筆記の具体相を明瞭化できたといえる。本研究ではシュレーゲルによる断章的書記の枠組みで〈筆記法〉の基礎を構築したが、これは同時に、活字がメディア文化の中心を占める1800年頃の一人の書き手・読み手に生じた「文化技術」の考究にも資する成果といえる。